

NICUに入院する心臓病の子どもと母親をつなぐ看護実践上の指針

松岡 聡美 (応用看護学)

【キーワード】 子どもと母親・心臓病・集中治療・看護・育児ケア

出生後に集中治療が必要な心臓病の子どもは、手術や治療による規制や面会の制限などで、子どもと母親の関係性を築くことが困難な状況にある。子どもと母親が健康に育み育まれるためには、子どもと母親をつなぐ看護が求められる。しかし、集中治療の場においては、子どもと母親をつなぐ看護の実践は、看護者の判断に委ねられている。

本研究の目的は、NICUに入院する心臓病の子どもと母親をつなぐための看護実践上の指針を得ることである。研究対象は、NICUに入院する心臓病の子どもと母親への看護過程6事例24場面における看護者の認識である。研究方法は、心臓病の子どもと母親をつなぐことを意識しながらかかわった場面を再構成し、研究素材とした。各場面において〈子どもと母親をつなぐために着目したかかわり〉の局面を選定し、〈かかわりの特徴〉〈看護者の認識の特徴〉を明らかにすることから、場面における〈心臓病の子どもと母親をつなぐ看護の視点〉52項目を取り出した。さらに、それらの共通性と相異性を検討し、NICUに入院する心臓病の子どもと母親をつなぐ看護実践上の指針9項目を得た。以下に示す。

1. 母親が直接子どもにケアすることは、母親らしさが実感でき、ケアの成功体験は自信につながるため、直接ケアができるように、子どもの特徴をつかみ、生活リズムを調整し、子どもの状態を整える。
2. 治療過程における子どものリスクを予測しながら、母子の健康なあり方に着目し、子どもの力が発揮できる方法を選ぶ。
3. 心臓病の子どもの状態の変化は、生命に直結することを念頭におき、母親による直接ケアを行いながらも、子どもの反応を注意深く観察し、ケアの継続や中止を判断する。
4. 母親自身が子どもの反応を感じ取り、主体的にケアに取り組めるように、子どもの反応の意味やケアの具体的な方法を母親に伝える。
5. 母親が子どもの状態に希望が持てない時は、母親の思いが揺れることを予測し、母親が思いを表出できるように促す。
6. 子どもの育児を他者に委ねる状況が続き、母親が自信を失くし、無力感を感じている時は、母親の頑張りや思いが、子どもの力になっていることを伝え、励まし、支え続ける。
7. 母親が子どもへの思いを表出した時は、その思いを受け止め、子どもにとって最善の方法を共に考え、チームで共有する。
8. 子どもの回復の兆しや、子どもの成長・発達を、母親自身が感じ取れるように、子どもの様子を伝え、共感し、共に喜ぶ。
9. 生涯にわたり医療が必要な子どもの育児は、母親のプレッシャーでもあるが、子どものわずかな変化でも喜びになるため、希望をもって前向きに取り組めるように支える。また、心臓病の子どもと母親を支える家族の力を見極める。